

## あなたの神殿は聖別されていますか

### ルカ福音書19:41-48 (新改訳2017訳)

- 19:41 エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。
- 19:42 「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。
- 19:43 やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、
- 19:44 そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。
- 19:45 それからイエスは宮に入って、商売人たちを追い出し始め、
- 19:46 彼らに言われた。『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」
- 19:47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、そして民のおもだった者たちは、イエスを殺そうと狙っていたが、
- 19:48 何をしたらよいのか分からなかった。人々がみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。

### 【祈りながら考えよう】

- (1) 都をご覧になったイエス様が涙を流されたのはなぜですか。
- (2) 涙の預言はいつ成就しましたか。どんな悲惨な出来事がありましたか。
- (3) 神殿聖別（宮きよめ）をなさったのはなぜですか。どんなことが問題としてあったのですか。

### 【解説】

#### (1) エルサレムのために涙される

エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。「もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。(41-42節)

主イエスの地上生活が終わりに近づき、エルサレムの町が見えて来た時、主はエルサレムとそこに住む人々のために泣かれた。ここで、「泣かれた」というギリシャ語エクラウセン (ἐκλαυσειν) は、「大声を上げて泣き叫ぶ」という意味である。

主イエスが「声を上げて泣き叫んで」という言葉は、ここにしか出てこない。ラザロが死んだ時、主イエスは涙を流された。しかし、声を上げて泣いたのではない。

主イエスが声を上げて泣き叫ばれたということは、よくよくのことであったということである。普通、大の男が声を上げて泣くなどということは、よほどの悲しみでもない限りありえない。主イエスは、何について大声で泣かれたのか。

それは、エルサレムとそこに住む人たちが余りに腐敗堕落しているために、やがて彼らの上に臨もうとしている裁きをご存知であったからである。

#### (2) 滅び寸前のエルサレム

エルサレムは「神の選民の都」である。アブラハムの子孫として、神がこの世界史の中に、ご自身の啓示の民として選ばれた者の都である。神は、そのエルサレムを愛してこられた。

しかるに、このエルサレムの民たちは、表面では熱心に神を信じていたようだが、その信仰は形式化し、儀式化し、単なるお祭り騒ぎとなって、神の御心から遠く離れてしまっていた。

イエスは何度も彼らを教えられた。涙をもって、あるいは怒りをもって、心底からの慈しきをもつて何度も彼らに迫られた。しかし、ユダヤ人の指導者たち、パリサイ人、律法学者たちはイエスに反抗するばかりであった。

今やエルサレムはまことに危ない、滅びの寸前にある姿である。神の招きを自ら拒んで神に反抗する者、しかも神の御名を唱えながら、神に逆らい、神を拒絶する、どうしようもない姿のエルサレムである。

#### (3) 涙の預言の成就

やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。(43-44節)



破壊されるエルサレムの都

#### ①ユダヤ戦争

イエスはエルサレムに向かって泣きながら、将来の破壊の事を告げられる。この言葉は間もなく文字通り実現した。紀元70年のことである。これは世界史に残る出来事、有名なユダヤ戦争である。

紀元1世紀に、イエスと同じ時代にユダヤに生存した歴史家で、フラビウス・ヨセファスという人が、有名な「ユダヤ戦争史」というものを書いている。そこに克明にその経緯を述べている。

紀元67年頃、ローマ帝国に対するユダヤ人の反乱が起こり、ローマの軍勢がそれを攻めた。まずユダヤに派遣されていた総督が軍をもってこれを攻めたが、全然歯が立たない。さらにシリアの総督が攻めたが、これもまた歯が立たない。やがてローマのティトウス将軍が(後にカイザルになる)大軍をもってエルサレムに押し寄せて来た。いわゆる飢餓戦術という、外からの補給を一切断って、城内を飢餓に追い込む戦術をもって、エルサレムを包囲した。

#### ②飢餓戦術の悲惨さ

しかし、エルサレムの都の中にいたキリスト者たちは、その直前、主イエスの言葉(ルカ21:20-21)に従い、小競り合いをしている間に、みんなヨルダンの向こう側、ペラという所に移住してしまった。後に残ったのは、イエスを拒んだ者たちばかりがそこに残った。

激しい戦いが繰り返され、城内は全く物がなくなってしまう、恐ろしい飢餓が襲った。飢え死にする者が、道にその屍を横たえる。少しでも物を持っている所に暴徒が押し寄せてこれを奪い合う。気の狂った若い母親は、まだ産んで間もない最愛なる赤ん坊を自分の餌食にしてしまうという、考えられない残酷な出来事がそこに展開されていった。そういうことを、「ユダヤ戦争史」の中に記している。

#### ③廃墟とされたエルサレム

ついに、エルサレムは紀元70年に完全に敗北する。ローマの軍勢は、ユダヤ人の心の中心であるところの神殿を徹底的に打ち壊した。イエスが語られたように、一つの石も満足に残らないほどに徹底的に破壊した。これがかつて人間の住んでいた所なのかと、そこに立つ者が、いぶかしく思わせるほど、戦争の結果、完全に廃墟と化してしまった。

イエスが語られたこの「悲しみの涙の預言」は、イエスが十字架に掛かって、復活して、天に帰られてから約40年経った頃、そのまま成就した。

エルサレムは、本来神の平和を表すために選ばれた者たちの都であった。しかし、イエスを城内に迎えながら、5

日後には、都の外に引きずり出し、十字架にかけて殺してしまっ

た。時はちょうど過越の祭りの頃。世界に散在しているユダヤ人たちが、そこに何万と集まっていた。そこで戦争が勃発した。何十万という者が殺りくされ、元気な若者たちは奴隷とされた。

(4) 2度目の宮きよめ

それからイエスは宮に入って、商売人たちの追出し始め、彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。」(45-46節)

主イエスの地上生活では、公の働きを最初と最後に、神殿聖別がなされた。ヨハネ福音書は最初のを記し(ヨハネ2:13-22)、他の共観福音書は最後のものを記している(マタイ21:12-17、マルコ11:15-19、ルカ19:45-46)。

このように、主イエスは公生涯の働きの最初と最後に、二度もそれをなされたということは、これが重要な意味を持っているということを示している。どういう意味で重要であったのか。

①神殿は神礼拝の場所

神殿は、神がそこに住まわれる所であり、礼拝の場である。礼拝が崩れていくことは、信仰生活が当然いけげんになっている。

いくら宗教行事は盛んになっても、心がこもっておらず、ただ単なる形式的なものに過ぎなくなってしまう。旧約時代の預言者たちが訴えたのは、墮落した形式主義であった。主イエスが実行使で臨まれたのも同じである。旧約時代の預言者たちは命がけて人々に警告を与えたが、主イエスはそれ以上に命がけてそのことをされた。

②商売人たちの追出し

具体的にどういことをされたのかを見る。ルカは、極めて簡単に、「イエスは宮に入って、商売人たちの追出し始め」としか記していない。しかし、マルコ福音書はそれをもう少し詳しく、次のように記している。

イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。また、だれにも、宮を通して物を運ぶことをお許しにならなかった。(マルコ11:15-16)

これは、かなり勇気のいることである。たとい主イエスの傍らに弟子たちがいたとしても、相手は大勢である。そんなことをしたらどうい報復を受けるかということは明らかである。

普通だったら、したくても出来ない。想像して欲しい。日本で、神社や夜店の屋台をひっくり返したらどういことになるかを。そういう所は、大抵ヤクザが仕切っている所である。

③商売人が神殿にいたのはなぜか

神殿の庭で売り買いをしているのは、どうしてなのか。両替屋があるのは、どうしてなのか。神殿に人々が来るのは、礼拝をするためである。当時、礼拝は犠牲の捧げ物をささげることであった。その犠牲の捧げ物は、牛、羊もしくは山羊、鳩と決められていて、お金のある人は牛、牛の買えない人は羊か山羊、それも買えない人は鳩でよかった。そうした動物や鳥は「傷のないもの」でなければならなかった。

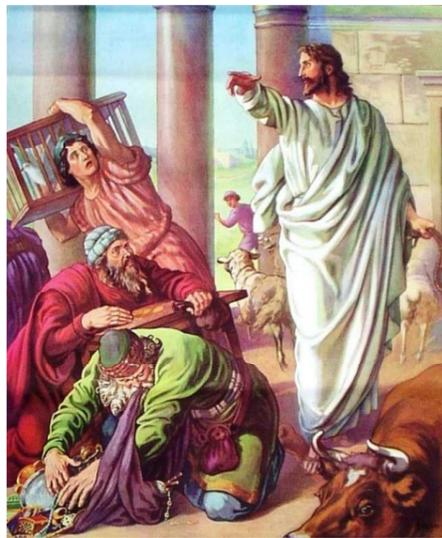
自分の家から引っ張って来て、途中で怪我でもしたら使い物にはならない。検査は厳しかった。そこで、神殿の庭では、検査済みの動物が売られていた。

④両替屋があるのはなぜか

また神殿に収めるお金(聖別金)は、ユダヤの半シケルと決まっていた。ローマやギリシャなどのお金を持って来ても、そのままでは使い物にならない。ユダヤの貨幣に替えてもらわなければならなかった。

彼らが神殿の庭でやっていたことは、礼拝に集まって来る人々のために便宜を図っているという点では、別に間違っていないように見えないこともない。しかも、それは許されたことであった。

しかし、その許されていることが正しいとは限らない。そこで商売をしている者たちは、礼拝するために集まって来る人たちの弱点を利用して、両替屋は、かなりの手数料を取って儲け、捧げ物の動物は普通のもの何倍もの法外な値段が付けられ、しこたま儲けていた。



(5) 強盗の巣にした

『わたしの家は祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にした。

「祈りの家」とはどういうことか。礼拝する所である。そこは異邦人の庭と呼ばれる所であり、異邦人はそこで礼拝をささげる。しかし、商売をする者たちの大きな声や動物の鳴き声、さらには器物を運ぶ人たちがそこを通路として使っていたわけであるから、そこで落ち着いた礼拝などささげられるわけがない。

さらに、商売をしている者たちは、大祭司の配下にあった。大祭司とその一族が私腹を肥やすために、それに力を入れていた。当時のユダヤ教は根底から腐っていた。主イエスは、このような有様であれば、やがて神の裁きが下り、エルサレムとそこに住む人々は滅ぼされてしまうと言っておられる。

(6) 私たちへの適用

以上のことが分かると、主イエスがなされた神殿聖別(宮きよめ)は、今日の私たちに当てはめると、教会の聖別であり、聖霊の住まいである私たち自身の聖別にほかならない。私たちがそれをしなければ、私たちの内に住んでおられる主イエスが、それをなさる。

聖霊の神殿を自分の欲望や名誉や人の評判などで汚していないか。自分のやりたいことをし、自分の肉欲を満たすために使い、暴飲暴食をしたり、隠れていかわしい雑誌やテレビ、ビデオを見たり、不品行なことをしていたら、主はたちどころに神殿聖別をなさる。

また、お金のことばかり考えていたら、心の中にある両替人の台をひっくり返されるであろう。主がお住みになりにくい状態なら、主はあなたの心をそのままにはされない。

安全でもないのに「私は安全だ」「私は平和のエルサレムなのだ」と思っているあなたの心を、主は根底からひっくり返し、あなたを痛い目に遭わせられることになる。

主イエスの神殿聖別は、今から二千年前にあっただけではない。主イエスは今も私たちの心の神殿聖別をし続けておられる。主イエスがあなたの滅びを望んでおられないことの何よりの証拠なのである。

神に関する事柄に営利主義を持ち込む危険は、いつの時代にもある。今日のキリスト教界にも、残念ながら、この悪がはびこっている。バザー、組織的な募金獲得運動、利益を得るために説教することなどがキリストの御名によって行われている。しかし、教会の中の悪習を改革することは、神のみことばに基づいたものでなければならない。

(7) 毎日、宮で教える

イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長たち、律法学者たち、そして民のおもだった者たちは、イエスを殺そうと狙っていたが、何をしたらよいか分からなかった。人々がみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。(47-48節)

《イエスは毎日、宮で教えておられた》

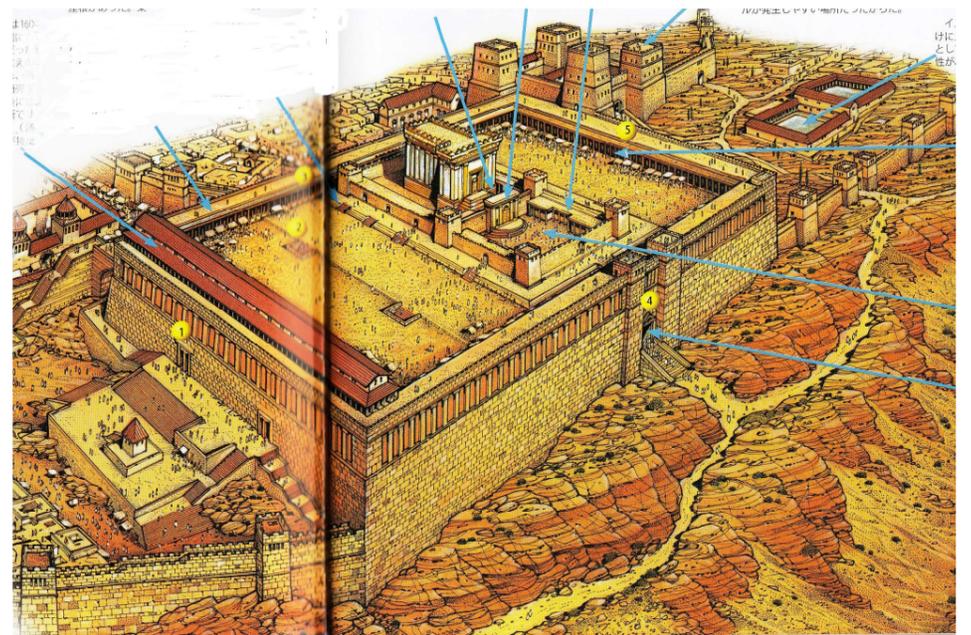
ここでの《宮》とは、神殿の中ではなく、(一般の人々の立ち入りが許されていた)敷地内の庭である。

ユダヤ教の指導者たちは《イエスを殺すための何らかの口実を得ようと躍起になっていたが、《人々はみな》は、奇跡を行うこのナザレ人イエスに心を奪われていた。主の時はまだ来ていなかった。

しかし、その時がまもなく到来しようとしていた。

その時、《祭司長》、《律法学者》、パリサイ人たちがイエスを殺すために迫って来る。

この日は月曜日であった。翌日の火曜日は主が公の場で教えられた最後の日であったが、その日のことは20章1節-22章6節に記されている。



オリブ山から見る崩壊前のエルサレム全景